

蕭軍『第三代』——愛憎の彼方にあるもの

下 出 鉄 男

はじめに

淪陷区東北出身の蕭軍（一九〇七—一九八八）は、流亡の地上海で魯迅の援助を得て、一九三五年八月に上梓した東北の抗日パルチザンを題材とする中篇小説『八月的郷村』（《奴隸叢書》之二・容光書局）によって脚光を浴び、翌年にかけて短篇集『羊』（一九三六年一月・文化生活出版社）、『江上』（同年六月・同前）に収められることとなる作品を雑誌に次々と発表した。この僅か数年における蕭軍の成長と充実は、今では過ぎた褒辞との観は否めないが、「新しい小説世界の展開を約束するほどの確かな未来性がある」（竹内好「最近の中国文学」一九三六年十二月《文芸》）という当時の評からも窺い知れよう。

文壇の注目を引いたことにも励まされ自信をつけた蕭軍が、時をおかずに筆を執ったのが、彼の故郷である遼寧省の凌河上流の山間に位置する村の人々の生活から想を得た長篇小説『第三代』である。凌河村という山村の住民の流転の歴史を主脈とし、大地主と村民或は周辺の山を根城とする土匪、男と女、親と子など、種々の人間関係の絆が、愛憎によって強められたり、断ち切られたりする様を追った全八部六十四章からなるこの大作は、一九三六年、《作家》第一卷第三号に第一部の冒頭三章が掲載されてから十五年の歳月を費やして書きつがれ、完成したのは一九五一年。その後、全篇にわたり推敲を重ね、『過去の年代』と改題し作家出版社から刊行されたのは一九五七年六月であった（一九八三年刊の黒龍江人民出版社版、二〇〇八年刊の『蕭軍全集』（華夏出版社）では『第三代』に戻されている）。

この間の蕭軍の歩みは平坦ではなかった。日中戦争の勃発により上海から武漢に移り、以後、臨汾、蘭州、成都などを転々とし、一九四一年に延安に入った。一九三八年、臨汾で蕭紅との六年間の結婚生活が終りを告げ、同じ年、蘭州で知りあった王徳芬と結婚。延安では王実味問題などをめぐり中共黨員との間に確執があった。戦後、彼をはじめ蕭紅、金劍嘯、舒群、羅烽、白朗等、文学史上「東北作家」として知られる作家の揺籃の地だった哈爾濱に十五年ぶりに帰るも、一九四八年、彼の主宰する《文化報》と中共東北局の発行する《生活報》との論争を発端とする蕭軍反動思想批判がおこり、《文化報》は停刊、蕭軍は撫順煤鋳総工会に配属された。人民共和国成立後は北京に移り、彭真のとりなしで北京市人民政府文化教育委員会文物組の所属が認められ、旧作の『八月的郷村』の再版（一九五四年九月・人民出版社）及び新作『五月的礦山』（同年十月・作家出版社）の出版も許可された。しかし、前者は《奴隸叢書》版に附された魯迅の序と彼自身の後記の削除を条件とした許可であり、後者は一九五五年に《文藝報》紙上で「毒草」と非難された。

『第三代』の出版が実現するまでにも曲折があった。一九五三年に中央文化工作委員会によって出版が許可され、人民文学出版社との間に契約が交わされたが、同社は用紙確保の困難を口実に契約を履行せず、その完成までに彼が作家として歩んできた時間のほとんどを費やした、八十五万字か

らなる苦心の作を二十万字に圧縮せねば出版しないと、無理難題をつきつけたという。『第三代』の全篇が難産の末ようやく出版されたのもつかの間、反右派闘争の最中の一九五八年一月、《文藝報》紙上に、延安時代に《解放日報》に寄稿した雑文「論同志之『愛』與『耐』」を批判する論文が掲載された。以後、一九七九年の名誉回復に至るまで、蕭軍は文学界から姿を消すこととなる。

十五年にわたり、作者と悲歎相交わる曲折した歩みを共にしてきた『第三代』の叙述が、その間に彼をみまった事件や時々の感慨に全く影響されなかったとは思えないが、一九四二年四月二十三日、蕭軍が日記に記した「『第三代』は静かな海にすぎない。それは、私が壮年に近づき、理性を透して蒸留した感情によって書いた作品なのだ」（前掲『蕭軍全集』第十九卷「日記（第二輯）四十年代（續）」という自作評は、彼が情況の変転にとらわれず、作品に描かれた人物の歩む時間に沈潜し、忌わしくも愛惜の念を断ち難き父祖の地の生活を対象化し、そこに根を持つ自己の存在のあり方を内観することに意を用いたことを物語る。『第三代』は、『八月的郷村』を「海の波しぶき」に喩えているのに対し、「静かな海」に喩えられている。抗日の輿論の形成に与るところが大きかった『八月的郷村』が同時代的な情況と相渉る動的な作品だったとするなら、「理性を透して蒸留した感情」によって書かれたという、静的な作品『第三代』において、蕭軍が自己の存在の根を遡ることによって追求した主題は那邊にあるのか。

人格や個性の独立を重んずる教育によって民衆の蒙を啓く、労農大衆を階級意識に目覚めさせ、革命によって彼等を主人とする社会をつくる等々、人民に無知と貧困から解放された自由な社会を約束する智識人の先見と確信に満ちた青写真には事欠かない。だが、蕭軍にとって、それは民衆の経験から何も掬いあげずに概念を弄ぶ生命のない抽象にすぎなかった。智識人は民衆を、他の指導がなければ自由を認識できない蒙昧な存在と看做す。確かに、民衆が、自己の生存の欲求を満たさんがために争い、自他の生存を脅かすのは、自由を知らないからだろう。だが、はたして民衆は他の指導なしに自ら自由を認識できないのだろうか。生存の欲求にその胚芽が宿されているのではないのか。蕭軍が『第三代』で追求したのは、未だ啓蒙の恩恵に浴せざる僻遠の村の、粗暴で野卑な人々の葛藤と流転の人生に蔵された自由な生存への可能性にほかならない。

一 楊三——「反逆児」の転落

『第三代』には四十を下らぬ人物が登場するが、本稿では楊三、劉元、林青、汪大辯子に焦点を絞って論を進めることにする。村を支配する地主の楊洛中、反骨精神に富む「老義和団」の井泉龍、汪大辯子の妻翠屏など、彼等に劣らぬ比重を置いて描き分けられた人物を他にもあげられるが、楊三、劉元、林青、汪大辯子に焦点を絞りこむのは、作中の人物の関係が彼等を主軸として広がっていくからである。では作品に眼を転じ、まず楊三について見ておくことにしよう。

時は清朝が倒れ民国が誕生して間のない頃。楊洛中を族長とする一族の支配の下で秩序が保たれていた村の平穏が破られ、村人は嘗てない混乱を経験し、ある者は活路を求めて村を離れていく。『第三代』全篇の主脈をつくる村民の流転の物語が始まるのは、楊三の起こした事件によってである。正月に演じられる秧歌で白素貞に扮し女たちを熱狂させる村一番の色男であり、名うての鉄砲打でもある楊三は、彼もその血統をひく楊氏の宗法秩序を乱した「反逆児」として姿をあらわす。

楊氏一族に属する家に嫁ぎ、病弱な夫に先立たれた林青の娘四姑娘が男児（三英）を出産する。こ

の「遺腹の児」の父が実は楊三なのである。三英を遺腹の児であると信ずる者は誰一人としていない。林青は、世間体を心配しつつも、娘の出産した孫の父親が、自然人の如く屈託のない精悍な楊三であることを喜ぶ。林青は三英に対面させてやろうと、楊三を連れて出産の祝いに娘の嫁ぎ先を訪ねるが、楊三は血統を汚す不義の児の誕生を罵る姑を殺害し、楊洛中の屋敷に監禁される。頭目の名を冠した海交幫という土匪の一味が、楊三を村の^も猛者たちの中でも際立った器量を持つ男と見込み、彼を仲間に加えようと楊の屋敷に夜襲をかける。楊三の存在を海交に教えたのは、楊三と同じ凌河村の出の賊徒劉元である。

楊三は賊徒の中で信任を得る。しかし、頭目の父親の代からその徒党の中ですごしてきた最古参の半截塔が懐かしがる昔日の勢いと輝きは、海交幫からは既に失われていた。

二人〔海交の父親潘清と、彼の双子の兄弟潘河—引用者〕は、自分でも数がわからない人馬を率いていた。ありゃ本当に、移動する人馬の大海だった。〔略〕海はたった一色、灰色か黒だ。でも俺たちの海は数えあげられねえほど色とりどりの海だった。兄弟は思い思いに、いろいろな色の絹の布を頭にまいていた。恥知らずな連中ときたら、袖のひろい女の衣装を着ていたものさ。そうだ、^{リボン}飄帯がいっぱいさがった、沢山の色をあしらった^{スカート}裙子も腰に巻きつけていたっけな。はは、奴等ときたら恥かしげもなくしなをつくり、奇声をあげて唱っていやがった。幾振りもの刀や鉄砲が太陽に照らされてきらめいていた。ありゃまるで海の魚みたいだ。あの銀色の海の魚さ。

蕭軍が幼い頃に故郷で見聞きしたことから材を得たと思われる、半截塔の口から語られる土匪の有様は、凶暴性の一方で、大人になりきれない派手好みの伊達者という賊徒の別の一面を活写している。これは誇張でも特殊な例でもない。白朗（白狼とも書く）の率いる匪賊が、河北省で英国人ら外国人の乗車する列車を襲撃し人質をとり身代金を要求した臨城事件で、賊徒は略奪した大きな羽飾りのついた婦人の帽子をかぶり、或はブラジャーを身に着け、これを小物入れがわりにして得意になっていたと伝えられる（フィル・ビリングズリー『匪賊』山田潤訳・一九九四年・筑摩書房）。

勢力の衰えた海交幫は、楊洛中のさしむける官兵に最早敵すべくもない。海交は殺害され、劉元、楊三、半截塔の三人は、彼の遺体を前に銃口を胸にむけ、「死ぬまで投降はしない。死ぬまでこの銃でお頭のために仇をとる」と復讐を誓い、半截塔を頭目に据える。劉元は、楊三がとみに老け気弱になった半截塔を助けて一党を率いるのを期待するが、楊三には、弱小集団に落ちぶれた海交幫に未練はなく、山中一の「美人」と評判の女のもとに足繁く通い兄弟分と疎遠となり、他の絡子（土匪の根城）と連絡をとり、投降を謀る。投降の報酬として村の巡査長の座を得た彼は、楊邸に出入りし、洛中の長男で放蕩者の軍人承徳と意気投合し、阿片の吸引をはじめ自堕落な生活に染まり、更に世間体から前任の巡査長の「妻」ということになっている洛中の娘珍珠を孕ませながら、承徳の愛妾金英とも関係を持ち、珍珠を袖にする。楊三の裏切りが、林青に彼と娘との間に孫ができたことを喜んだ己の不明を後悔させ、楊三を兄貴分と慕い、海交のために復讐を誓いあった劉元に無念の思いを抱かせたことは言うまでもない。

楊三の人物像は、投降をはさむ前と後では印象を異にする。前者では、偽悪的ではあるが、心根は善良な潑刺とした若者であるのに対して、後者では仲間を裏切って投降し、女色に溺れる「墮落した反逆児」である。楊三の投降は、些か意表をつくが、「匪賊になった日から、投降する気はないね。それは真っ当な男のするこっちゃねえ」と話す劉元を、楊三が「俺が役人になったら……」とまぜかえす場面（第二部第一章）などに暗示され、彼の投降の顛末を叙する筆の流れに不自然さはあまり感じられない。しかし、楊三が四姑娘への背信に毫も疚しさを覚えず女色を貪り、放蕩の限

りをつくす物語の展開には違和感を覚えざるをえない。性愛への関心が蕭軍の作品で占める比重は小さくない。「鰥夫」(一九三五年十二月《文学季刊》第三卷第四期)、「同行者」(一九三六年四月《作家》第一卷第一号)などは、性愛の自然的な欲求と禁欲との葛藤を介して、天涯孤独な放浪の人生を選んだ男の像に余情を与えた佳作と言える。これに対し、『第三代』においては、性愛への偏執と、その叙述の表面性が、楊三の行状をめぐって眼につく。しかし、楊三の好色を書き連ねた必然性がどこにあるかを考えておく必要はあるだろう。肯定的に言えば、性愛は生命の自然な発露である。だが、性愛の自然的な所与性から脱さずに、「愛」は存在しうるだろうか。楊三の放縦な性欲に含意されているのは、欲望の自然的な所与性から自由になれない精神の未熟が、彼に裏切りを重ねさせたということである。

次に引くのは楊三が林青に連れられて四姑娘を訪ねる場面(第一部第二章)である。傍線を附したのは、《作家》掲載時にはなく、五十年代に全篇を上梓するのを期して、新たに書き加えられた箇所である。

自分が老けたのを感慨深げにこぼすのを楊三にからかわれた林青が、「少年、白頭翁を笑う莫れ」などと彼に意見すると、

彼はたまらず大声で笑った。

「相変わらず子供みたいに笑いおって。」林青はこの若者をしげしげと見ていた。「わしの娘が子供を産んだんだぞ。」

「どうして人が子供をつくってはいけないんだ。」楊三はそう言いながら、まだ笑いやまなかった。

「あれは後家なんだぞ。人はどう言うだろう。『遺腹の児』でないと誰が信じる。なあ、お前はどうか。」

「信じようと信じまいと人の好きにするさ、豚だって気のむくまま子供をつくれるじゃないか。後家が子供を産んで何の不思議がある。」楊三の表情から笑顔はすっかり消え、突然、梟のように笑い声をあげた。

手の加えられる以前のテキストでは、楊三は、彼と四姑娘との性愛を不義とする宗法秩序に抗う「反逆児」の如く見える。『第三代』の連載が《作家》誌上で始まって間のない頃、竹内好と共に蕭軍に注目した武田泰淳が、「以上は人間の否定的なタイプを描き苦悩を追求せる作品であった。ここに一人、本年むくむくと身を起こし、人間の肯定的なタイプを描き、生の喜びを伝えるがごとき作家が出現した」(「昭和十一年における中国文壇の展望」一九三七年一月《支那》)と書いた所以である。では、加筆された作家出版社版は、どのように読めるのだろうか。

楊三の表情から笑顔が消えたのは、寡婦である娘の出産に対する世間の眼を心配する林青を慮ったからなのか。或は、自分はこの母子に、どうしたら誠意を尽せるのかと考えを回らしていたのか。いずれにせよ、第一部第二章まで範囲ではこのように読み取れなくはない。引用した箇所の後に続く下りで、楊三は林青に、四姑娘に対して疚しいところがないことを受けあってすらいるのである。だが、このように解釈すると、楊三が最初に私たち読者に与える爽快な印象と、海交の死を境に投降の機を窺いはじめる第三部以降に描かれる彼の卑劣な振舞とが、いっそうちぐはぐに見えてくる。

当初から楊三の墮落は構想に織りこみずみだったものの、さすがに筆が滑りすぎたと作者も感じたのであろう。加筆が、前後で異なる印象を与える楊三のちぐはぐな人物像を補うためだったのは疑われない。だとすれば、楊三から笑顔が消えたことに暗示されているのは、欲望に駆られた自分

の行為の結果に対して腰がひけているということであろう。梟のように笑ったのは、それを林青に気づかれまいと取り繕うためである。楊三は、ただ自分の恣にしていただけなのである。官に投降し欲望が満たされるのであれば、何の満足も期待できぬ海交幫の残党に義理立てし、彼等と命がけで官に逆らうまでもないし、自分の息子の母親だからといって、四姑娘一人を愛さねばならぬ謂れもない。これが、楊三が裏切りを重ね、その羈絆を齒牙にもかけていなかったはずの秩序の側に籠絡された「論理」である。こうなったのは、単に彼の性根が腐っていたからではない。自己を律しえぬ精神の未熟が彼を欲望の奴隷とし、自由ならぬ放縦に走らせたのである。

二 劉元——「緑林」との袂別

富農の息子である劉元が海交幫に投じたのは、家から金をくすね博打ですった彼を生き埋めしようとした父親の劉三蹶子と反目したためである。だが、同じ無頼の徒とはいえ、劉元は自恃の強い楊三のように自分の膂力や勇気を銜うこともなく、土匪の悪習（阿片の吸引）に染まらず、農民の心を失わずにいる。楊三と見張りに立った山上で、刻々と変化する空模様を眺めて、雨が少ないのを心配する劉元は、楊三に「強盗になった奴でも、そんなことが気になるのかい」とからかわれ、「凶作になり、どいつもこいつも強盗になっちゃったら、誰が誰から奪うんだ」と応ずる。劉元がこう反問したのは、海交幫の米櫃を案じてもいただろうが、賊に似つかわしくない自分の堅気なところを楊三に見透かされ、きまり悪かったからである。

彼は女性に対して楊三のような浮ついたところがない。羊角山に立て籠もる海交幫は凌河村の農民汪大辮子の女房翠屏を匿う。村でも評判の美人だった彼女は、亭主が土匪の楊洛中邸襲撃を手引きした罪で投獄されている間に、村に派遣された巡査長につきまとい、二人の息子を隣人に托し、彼等をたよってきたのである。賊徒の世話をして過ごす翠屏は、小心者の亭主にはない逞しさのある、彼女が嫁いだ時はまだ子供だった劉元に心を寄せる。翠屏に下心を抱く楊三は、劉元が彼女をどう思っているか知ろうと、劉元に「俺にはわかってるぜ。ずばり言っちゃえば、翠屏がお前に惚れちゃったてことよ、お前だってそう思ってるだろ」と探りを入れる。しかし、劉元は自分の感情を面に出さない。楊邸襲撃のためにその動静を探ろうと汪大辮子を海交に合わせ、事件に巻きこんだのは劉元である。汪大辮子は、海交から札に渡された腕輪を隠し持っていたことが発覚し投獄されるが、臆病な彼は襲撃の手引きをするどころか、その様子を見てうろたえるばかりだったのである。劉元が翠屏に心を動かされまいとするのは、夫が獄中にある隙に、彼女を寝取るような卑劣な真似はできなかったからだろう。楊三の眼には、汪大辮子が翠屏の夫には相応しくない、風采のあがらぬ男と映っても、劉元にとって、彼は今も気心の知れた親しい隣人なのである。劉元は信義を大切にする男なのである。

劉元を楊三と最後に分かつのは、海交幫に対する忠誠の有無である。海交から眼をかけられ、仲間からも可愛がられた劉元にとって、彼等を結びつける親分と子分、兄貴分と弟分の絆は、堅気の社会からはみだした、ならず者のコミュニティを成り立たせる擬制的な親子、兄弟関係以上のものだった。そこに加わった以上、死ぬまで仲間と実の親兄弟にもまして濃い血の絆で結ばれていなければならない。楊三から俺が投降し役人になったらどうするかと問われた劉元は、「心の臓を抉りたらにゃあならねえ」と答える。彼にとって、投降は死をもって償わせねばならぬ、親分、兄弟分に対

する最も許し難い裏切りなのである。

現実には官と匪との差は紙一重である。官の側からみれば、その掃討に手を焼く匪を招安し正規軍に取り込むのは、手っ取り早い治安対策であり、匪、特に多くの配下を擁する頭目にとって、招安を受けて帰順することは、昇官発財の絶好の機会であった。晩清、蕭軍の故郷の近隣に張作相という匪賊の親玉がいた。当地で名うての匪賊を率いる彼は張作霖の一派に合流、作霖と共に帰順し、やがて將軍の座を占め吉林の支配者となった。後に「満洲国」に仕えたことでも知られる。蕭軍は故郷ですごした幼少年時代を顧みて、当時、張作相は故郷の人々の憧憬の対象だった、と述べている。彼の叔父をたちも、官匪の間を往き来した猛者であった（「我的文学生涯簡述」一九七九年《吉林大學學報》第五、六期 / 「我的童年」一九八二年十月・黒龍江人民出版社）。

楊三と劉元とを通して描かれているのは、民衆を抑圧、収奪する官の補完物としての匪の実相と、ならず者とはいえ信義に厚く、少なくとも弱者は食い物にせず、ひたすら官に逆らい悪覇を懲らす、義侠心のある「緑林の英雄」像と言えるかもしれない。蕭軍のシンパシイが注がれているのは俠氣に富む劉元であろう。しかし、この対比が意味するのは、単に善悪の問題にとどまらない。民衆（主に男たちであるが）の反逆の夢と、張作相ら緑林出身者の成功によって掻きたてられた立身出世への欲望が背馳する二つのものではなく、一つことの二つの現れだったということである。両者の関係は楕円に喩えられるだろう。言うまでもなく、二つの定点からの距離の合計が常に等しい点の描く軌跡が楕円と定義される。二つの定点を反逆（匪）と立身（官）とすると、その周囲を移動する第三の点が、力関係や情況の推移に応じて二つの定点に対して近づいたり遠のいたりしながら一巡して描く楕円状の軌道上で、官匪の間の抗争と狎れあいが循環的に繰り返されることになる。官とは朝に上った匪であり、匪とは野に下った官なのである。

何を欲するかにかかわらず、匪となるのが飢えた欲望を動機とする捨鉢の挙動だとすれば、官となるのは欲望の満足が保証されるのを期待するからである。楊三は欲望の満足を約束する利に誘われて投降したのだから、官であることで期待した満足が得られないと見れば、匪に再び加わるに違いない。投降を肯んぜず匪であることに徹し、投降に対して死をもって報いようとする劉元も、報復が際限のない暴力の応酬を招き、投降が後を絶たない以上、官と匪の関係に楔を打ちこむことはできない。投降を拒み匪として生きることが意味するのは、官と匪とからなる暴力の体系に自己を閉じこめるということである。劉元一人が気節を守り通し、報復を成就したとしても、楊三に象徴される放縦な欲望に根をはるこの体系は、微動だにしないであろう。しかし、第六部第四十六章「最後の決戦」において、劉元に転機が訪れる。彼が報復を翻意したのである。

劉元ら海交幫の残党は、私兵を擁し各集落を牛耳り、官と氣脈を通じた匪賊もどきの悪覇（ボス）が結成した、匪賊掃討を目的とする同盟（聯莊會と称する）と、これと連携した軍・警察の攻撃を受け潰走する。銃傷を負い河原に逃げのびた劉元の前に楊三が姿をあらわす。

こちら側の銃撃がやんだ合間をぬって、一頭の馬が砂塵と水しぶきをあげて劉元の前に迫った。

「楊三、飛んで火にいる夏の虫だ。」

一発の銃声が鳴り響くと、楊三の馬は身体を回転させ、前肢をあげ鋭くいなき人もろとも河原に崩れ落ちた。その一瞬、意識が朦朧としながらも、楊三にはそれが劉元だとわかった。しかし、劉元は二発目を撃たず、楊三に悲しそうに笑みを浮かべ林に姿を消した。

劉元をして、楊三に止めを射すのを思いとどませたのは何であったか。

官に寝返り、剿匪軍に加わって彼等の討伐にやってきた楊三は、「投降しない」、「海交の仇討をする」という誓いを律儀に守り通す劉元にとって、死をもってその背信を償わせねばならぬ仇敵である。だが、楊三に二発目を撃たんとした一瞬、劉元の心を、報復の意思を覆うように、彼の知る親しい人々をめぐる様々な想念が去来したに違いない。

子供だった頃に彼の憧れた、嘗ての楊三はどんなに颯爽としていたことか、野卑な言葉で言い争うこともあるが、裏表のない気のおけない凌河村の隣人は達者だろうか、官匪の争いによって静かな生活を乱され村を離れた人たちは、どこでどう暮らしているか、生き埋めにされそうになった恨みは忘れられぬものの、父親や愛する母と妹は、剿匪軍に攻められ窮地に立たされている自分をどう思っているか、そして殺された海交と兄弟の無念……。これらの想念が一つとなった時、劉元は報復を翻意したのである。

裏切りに対する報復は「緑林の掟」である。しかし、楊三一人を殺したからといって何も終わらないし、何も始まらない。これから自分で賊徒を集めるか、いずれかの徒党に投ずるかして再び官に逆らっても、殺戮、投降、報復を繰り返し、憎しみと恐怖で人々を苦しめ、最後は振り出しに戻ってくるだけではないか。劉元が楊三に対する報復を思いとどまったのは、墮落した楊三に対する憐憫の情が働いたからでもあったろうし、同じ村に生を享けた者の間の絆を断てなかったためでもあろう。いずれにせよ看過されてはならないのは、それが死んだ海交と兄弟への裏切りと知りながら「緑林の掟」を破り、かつ投降もしなかったことである。劉元は、あの呪われた楢円の軌道の外に踏み出す契機を掴んだのである。報復を翻意したのは、必ずしも海交や兄弟への裏切りを意味するとは限らない。この世に恨みを残して死んだ彼等の遊魂が本当に安息を得られるのは、人々が徒な暴力の応酬から脱することによってではなかろうか。

三 林青——「人生の長夜」を照らすもの

林青は思慮深く、人には窺い知れない何ものかを胸中に秘めているが、貧しい村人にとっては気のおけない隣人であり、彼が得意とする胡弓の弾き語りで人々の心弦をふるわせることのできる村の芸術家である。そんな林青を、楊三は「凌河村の良心」と呼ぶ。

楊洛中は、楊三の不義を黙認し彼に服従しない林青を懲らしめようと、汪大辯子と共に投獄する。林青の不在の村に、彼の息子の林栄が突然帰ってくる。シベリアを渡りペテルブルグまでロシアを旅してきたのだという。彼の持ち帰った手風琴は、林青の胡弓に替わって村人の心をとらえ、井泉龍は自分の娘を彼の嫁にと考える。しかし、広い世界を見てきたことを鼻にかける林栄は、卑小な村の生活に飽足りず、長春でロシア人の妻と、愛民村と呼ばれる貧しい中国人の居住区で酒場を開業し、母と妹を迎える。

出獄した林青は長春に行き、家族と再会する。しかし、放浪癖があり、誰であれ人に縛られるのを厭う彼は、彼が酒場を手伝うのを期待した息子や妻の意に反し家を留守にすることが多く、一足先に出獄し家族と長春に移り、林栄が紹介した旅館で働く汪大辯子を訪ねるほかは、あてもなく街を徘徊する。碧眼の嫁と、言葉の通じないその子供にも馴染めなかったが、林青が家族と疎遠になったのは、何よりも、利を求めることに貪欲な、野心家の息子への嫌悪のためだった。林栄は日本人と手を組み、阿片窟の開業を計画してすらいた。息子の世話になるのを嫌い、林青は街頭で胡弓の

弾き語りをし、手作りの胡弓を売って収入を得るようになる。自分は酒場集る貧民とは身分が違ふと自負する林栄は、人がそれを知ったら彼の顔をつぶしかねないと、河原乞食の如く暮す父親を嫌悪する。家族を顧ない彼に腹を立てる林老太との口論も絶えない。

細君や息子と心が通わず、更に楊三に裏切られたことを知った林青は孤独だった。林青は、彼から胡弓を買った、遠く楊柳青から身売りされてきた可憐な遊女小青に彼の奏法と歌を伝授し、彼女のために丹精こめて彫琢を施した胡弓を贈る。小青と会うことは林老太との諍いの新たな火種となりはしたが、歌の調べを介して互いの孤独な心の交感ができる小青は、林青にとって、彼の感得した人生観を籠めた歌の無二の理解者だったのである。やがて、小青は開埠局長に身請けされ妾となる。ある宴会の席で、小青はそこに居合わせた楊洛中の次男承恩の前で、そうとは知らずに、林青から伝授された歌（凌河の流れは東へ東へと / 山の草は / 一年また一年と枯れては生じ / 年々青くなる / あなたの家は豊かでも私は貧乏 / 豊かでも常に豊かならず / 貧しくとも常に貧ならず / お日様は一つ家の門口ばかりを照らしやせぬ）を披露する。日本留学帰りで、放蕩な長兄承徳に失望した洛中の期待を一身に受けた承恩は、愛民村を撤去し、満鉄付属地に対抗して中国人自身の都市開発を進めようとする開埠局長の後楯を得て、その跡地にマッチ工場を建設することを計画していた。承恩は小青の歌を聞き、父にとって村で最も御し難い男の一人が今彼の近くにいるのを凶らずも知ったのである。それから間もなく、林青は退去を迫られた愛民村の住民のために一肌ぬぎ、開埠局へ請願に赴くこととなる。結局、請願は報われぬのであるが。

楊一族、村民、海交幫の三者をめぐる確執と抗争、身内の諍い、その背信によって振り切れてしまった楊三との間の愛憎の振子、これら大小の争いが絶えぬ人世に疲れた林青には厭世の翳が漂う。林青は人に邪魔されない自分の時間を求めた。林老太を怒らせたように、林青には気儘なところがある。しかし、ただ気楽な生活を望んでいたのでも、自己本位だったのでもない。如何にしたら、いつも何ものかに飢え荒んだ心を抱き諍い争いあう、この呪わしい人生に終止符が打てるのか。林青がそれを考えられるのは、一人きりになり、静かに自他の存在を觀照し省みる時を措いてほかになかったのである。第五部第三十六章「長春城」に、林青の人生に臨む態度が記されている。

……彼は世間の全てに対して冷淡であった。自分が存在しているのか否かについてすらも冷淡だった。彼はこのような超然とした冷淡さをもって全てを觀照し、全てを受け入れ耐え忍んだ。彼は、井泉龍の如く、生死を賭けて決然と闘うことができなかつたばかりか、自分の憧れるものを情熱的に追求することもできなかつた。彼はできるだけ憎悪するものを避け、それと接するのを望まなかつた。しかし、臆病だつたのではない。どうしても闘わなければならぬ時には、決して弱音を吐かなかつた。だが、闘いに勝利しても、自分はひとすじの青い煙のような細い影となつて、この勝利の輝きから人知れず立ち去つた。彼は敗れ去つた敵に追い撃ちをかけなぞしなかつた。それに人に自分が勝ち誇つて見せることなどまっぴらだつたのだ。彼は全てを憎悪していながら、それらから決然と遠ざかることができなかつた。色々な汚れのしみついた衣服の下から、彼は最も本質的なもの、最も貴重なもの、最も微妙なものを知り、これらを自分の智慧とし、螢の光の大きさに圧縮して自分の前に置き、その緑色の小さく微かな灯火をたよりに、この漆黒の人生の長夜を歩み続けようとしか望まなかつた。彼は、誰のであれ、人の率いる大きな軍勢の火炬たいまつに従つて進みたくはなかつたし、自ら火炬を掲げて人を自分の後に着いてこさせようと企てもしなかつた。人の英雄的な行為——嘗ての井泉龍や楊三のような——を、激励をこめて称え尊敬しはしたが、自分がこの「英雄の情熱」に心を奮い立たされ、燃え

立たされるのを厳に防いだ。こんな時、つまりは何か外から加わる大きな力に影響され巻きこまれ、自分の道から引き離されそうになると、彼は胡弓を手にとった。胡弓をそっと奏でさえすれば、自分を石の如く凝固させて、あらゆる感情や動揺する思念を弦に注ぎこみ、縹渺たる煙の如く、湾曲しながら進む小川の如く、それらを宙に漂わせ、眼には見えないどこか遠いところへ流してしまうことができたからである。

林青も闘いを辞さない。しかし、生存ために已むを得ず闘うのであって、憎悪のためではない。だから、敗走する敵を追撃しない。憎悪を動機とするから、闘う双方に根深い怨念が残り、いつまでも争いがつきない。これが「漆黒の人生の長夜」の意味である。

「色々な汚れのしみついた衣服」が、幾代にもわたって無益な争いのために血と汗と涙を流してきた人の罪悪の隠喩であるとすれば、その下から林青が見出した「本質的なもの」、「貴重なもの」、「微妙なもの」とは、人を争わせる憎悪や利欲に蝕まれていない、しかし、それを集めても螢の光ほどの明るさにしかならない、あるかなさかの無垢な人性、言わば誰もが具えている天性の自由を指しているだろう。敵と我とを問わず、人に天性の自由が存しているのであれば、互いに生存を脅かす争いを続ける道理などありえない。その存在を信じられなければ、辛うじて光を発する天性の自由の僅かな残り火すらも消えてしまうだろう。天性のとはいっても、自由はいながらにして享受できるものではない。それは、発見され、創造されてはじめて存在しうる、秘せられた人の可能性の謂いである。

林青は、誰であれ、人の掲げる火炬の後に従う列に加わることも、自ら火炬を掲げて人を先導することも望まず、「英雄の情熱」に感化されまいとする。「火炬」と「英雄の情熱」には衆人の心を鼓舞し、闘いに立たせる力がある。しかし、闘争には敵意がともなう。言うまでもなく、人の享くべき天性の自由は、敵意によっては蘇生できない。自由のためだったはずの闘争が、しばしば、それが目的とする自由から人を遠ざけ、手段である闘争が目的の坐を占める所以である。自由は脆く壊れやすいものなのである。林青は胡弓を奏で、「外から加わる大きな力」によって昂ぶらされた心を鎮め、闘争の狂風から、敵我の対立を超えて存する天性の自由の火種を守る。如何なる闘い方をしようとも、これを慈しみ点し続けていなければ、「漆黒の人生の長夜」が終わらないのを、彼は知っていたのである。

林青の生き方には、国共内戦をめぐる蕭軍の発言と通底するものが認められる。蕭軍は、人民解放戦争を誹謗する「反動言論」と批判された文章の一つで、「今日の戦争も最後の平和のためではないか。戦争のための戦争だとでも言うのであろうか。戦争は『おもしろい』ことなのか。けれどもこの戦争において、双方で一番多く死ぬのは労農大衆ではないか。彼等は元々兄弟だったではないか。彼等が蒋介石本人だとでもいうのか。」（「古潭里的聲音——駁生活報的胡說」一九四八年九月一日《文化報》第五十六期）と書いた。その性質の如何を問わず、戦争はそれぞれ敵我に向けられた愛と憎が激しく闘ぎあう坩堝である。蕭軍にとって、戦争は民族と人民の解放のためには不可避であった。だが、戦争の惹起する、友と敵を分かたず愛と憎の葛藤に囚われ、人々が反目し続けるのを憂えた。友と敵を分かたず愛憎の上に打ち立てられる権力の支配が、戦争に劣らず無慈悲となるのを知悉していたからである。戦争は、人々が共に享けるべき自由を、敵我の区別なく蹂躪せずにはおかない。蕭軍にとって、文学という営為、就中『第三代』を書き継ぐ意味は、「漆黒の人生の長夜」の中であって、この自由の灯火を慈しみ守ることにあったに違いない。

楊三への報復を翻意した劉元は、裏切者への憎悪の感情を根拠とする「緑林の掟」の呪縛から己

を解き放った。山中で傷の癒えるのを待って、劉元は、井泉龍の家に身を隠した後、彼の子をやどした泉龍の娘の大環子を村に残し、哈爾濱に旅立っていく。それは、これまでの生き方と袂を分かち、新たな人生の活路を求める闘いの旅の始まりであることを予見させる。劉元自身はそれを知る由もなかったであろうが、敵我の血にまみれた彼の服の下に、暗夜を歩む林青の前を照らしているのと同じ、あの螢のように小さな光が射したに違いない。ここで一つの疑問が残る。それは楊三である。

林青は楊三に失望し、「腐蝕した銅片を、こともあろうに純金と勘違いし」、「この恥ずべき毒薬を娘に飲ませるのに手を貸し、かわいそうな小さな果実を結ばせてしまった」己の罪を責め苛む。両者を隔てる深淵は、最早埋められぬかのようなのである。だが、林青は「全てを憎悪していながら」、「汚れのしみついた衣服」の下に、「本質的なもの」、「貴重なもの」、「微妙なもの」が存していると信ずればこそ、「それから決然と遠ざかることができなかった」のではなかったのか。だとすれば、林青が、この「放蕩息子」が帰ってくるのを断念したとは言い切れない。嘗て林青を「凌河村の良心」と呼んだ楊三の心に、その記憶が刻まれてはいなかったか。残念ながら、楊三の行状を追う蕭軍の否定的な叙述からは、それは空しい期待と見える。しかし、蕭軍が劉元に報復を思いとどまらせたことは、少なくとも楊三から再生の可能性を奪いとらなかったことを意味しているだろう。

四 汪大辮子の帰郷——むすびにかえて

『第三代』は、汪大辮子が翠屏と次男を連れて凌河村に帰郷する場面で結ばれている。

「おらたちの家が見えたかい。」汪大辮子は眼を細くし、笑っているとも笑っていないともつかない表情で二柱にきいた。

「いいや——」子供は首を横にふった。

「木に隠れてしまったな。井（泉龍——引用者）爺さんの家は。」

子供は同じように首を横にふっただけだった。

「ほら、すぐそこだよ……」彼は子供をいとおしむように、一軒だけ離れて佇む石を積んだ家を指さした。〔略〕

翠屏は終始一言も話さず、ぼんやりとしたまま、一日の道のりを歩き終えた。今、既に凌河村についたのに、彼女の眼の前には何一つ存在していないかのようなようだった。

「おらたちじきに家に帰るのかい。」二柱はおっとうにきいた。彼は、胡小五が街で買ってきた、壊れた玩具、それに一振りのブリキの刀を大切に抱きしめていた。

「ああ」そう答えながら、大辮子は思い直した。「いや、先に井爺さんのところへ行ってから家に帰ろう。」

半分沈みかけた太陽が、静かに波打つ山の稜線に没していった。あの鋭く尖った羊角山の影が、うすく紫色がかかった西の空に鮮やかに映え、翠屏の眼に焼きついた。

右の引用に至るまでの、汪大辮子の足跡を辿っておこう。

「大辮子」という綽名が物語るように、清帝の治世が終わっても辮髪を残した彼は、父親から相続した家と田地を子孫に残すことを人生の目的とする保守的な農民である。しかし、前に述べた経緯で、土匪の協力者の嫌疑をかけられ投獄されたことから、彼の人生に大きな狂いが生ずる。出獄し

た彼は、真先に翠屏を羊角山から連れ戻し長春に移り住む。長春で旅館の番頭に雇われた彼は、再会した林青をして、「お前すっかり商売人らしさが板についたな」と賛嘆させるほど、以前の朴訥さが消え、如才なく人に応対する都会的な物腰を身につける。翠屏と二人の息子（大柱と二柱）も外に働きに出て家計を助けてくれるおかげで、一家が糊口を凌げるだけでなく蓄えを残せると期待した彼は、長春で十年も働けば、田地を買い足し家畜を手に入れ、息子たちに嫁をとり、家族仲睦まじく不自由のない暮しができると夢想する。しかし、汪大辯子の夢想の前には大きな障碍あった。それは翠屏である。翠屏は忌わしい記憶を蘇らせる凌河村に帰るのを望まず、帰郷に拘泥する夫を「あんたって人は不甲斐ない犬よ、何だってあんな捨てられた骨をほしがってばかりいるのさ」と面罵する。彼女が劉元に心を寄せていたことを楊三から聞いた汪大辯子は嫉妬心を抑えられず、翠屏は劉元に未練があるのではないかと疑い、夫婦の間に感情の齟齬が広がる。そこに、翠屏が彼女に対する夫の真心に不審を抱かせる事件が起きる。翠屏は、愛民村の住人で、女の性を食い物にして暮す与太者に凌辱されるが、汪大辯子は、彼女をいたわるところか、お前に「奸情」があったからだなどと彼女の不徳を責めたてたのである。思い余った翠屏は自殺をはかり、教会の経営する病院に運ばれ一命はとりとめるが、そこでキリスト教と出会った彼女は、家族から離れ、信仰に救いを求め雑役係として教会に住み込む。汪大辯子は、翠屏の自殺騒ぎで悪い評判が立つのを嫌った旅館の主人から暇を出される。不幸は更に続く。二人の息子は日本人の経営するマッチ工場で働き両親を助けていたが、次男の二柱が発火したマッチで手を火傷したうえ、彼の「不始末」を責める監督者から顔を殴打され視力を失ったのである。将来の不自由のない暮しの夢はおろか、糧道まで絶たれた汪大辯子は帰郷を決心し翠屏を教会に訪ね、一緒に帰るよう哀願する。彼の求めを頑なに拒む彼女であったが、二柱を不憫に思い帰郷に応じる。汪大辯子は、息子と同じ工場で働く正義感に富む青年胡小五に長男を託し、翠屏と次男を伴って長春を後にする。

汪大辯子は、劉元や楊三のように行動的ではない。また、林青のように思慮深くもない。男として劉元、楊三に劣る小心者と侮られまいと、彼は見栄を張る。しかし、意気地なしと見られるのは癪だが、彼等と張り合わんがために匪賊に投じて、お上や楊洛中に楯突く意思はない。汪大辯子の人生の目的は、前述したように、父が遺した財産を守り、これを子々孫々伝えていくことを措いてほかにないのである。劉元も楊三も、そんな彼にとって、人の生活を掻き乱す無法者にすぎない。林青は、彼が心を許せるほとんど唯一の人であるが、林青が心中で何を考えているかは、汪大辯子には謎である。彼は、それが何かを知りたいとも思わない。彼は自分の腹の足しにならぬものには興味がないのである。

汪大辯子は、男を引きつける魅力を持つ翠屏の心が誰かに靡きはしないかと怯え、彼女に猜疑の眼を向ける。汪大辯子が心得違いにも、凌辱された女房の不徳をなじったのは、彼女と劉元への嫉妬に駆られた意趣がえしのためにほかならない。妬み深く利己的な汪大辯子を善良だとは言い難い。しかし、人を不快にさせる欠点があるとはいえ、汪大辯子に、その目的がどんなに矮小と侮られようと、自分の生活を守るために地道に働く勤勉さがあったことは否定できない。彼は、「安分守己」という言葉に表現されるような、己の身の丈に合わぬ途方もない野心など抱かず、規矩を守って暮らすのをよしとする人生観の持主なのである。換言すれば、所謂、小・中農の保守的な心理ということになるろうか。

汪大辯子は、劉元や楊三のような、物語を展開させる事件の主役でもなく、林青のように、作品を貫くモチーフを示唆する人物でもない。にもかかわらず、この三人と共に、物語の中心に置かれ、

その行状と心理が克明に描かれる。周知の如く、清末から民国初にかけて、外国、就中日本の侵略による社会の混乱を背景に、いずれが官とも匪ともつかぬ集団の間で交わらされる抗争によって社会は荒廃した。『第三代』において、かかる時代に翻弄された庶民を最もよく代表するのが汪大辮子である。太平の世なら、汪大辮子は勤勉に働きさえすれば、彼の人生の目的を実現できたであろう。しかし、それを保証する所与の生活圏が崩れてしまった以上、「安分守己」をよしとしているだけでは、帰郷しても彼の人生の目的が達せられる望みはない。凌河村を「捨てられた骨」に喩え、故郷に拘泥する夫を「犬」呼ばわりし、彼の不甲斐なさを罵る翠屏は、このことがわかっていたのである。

翠屏の見あげる視線の先にあるのは、嘗て劉元が立て籠もっていた羊角山である。太陽の残光に映える羊角山を見て彼女は何を考えたのか。このまま村に埋れるのを運命と諦めてしまったのか、それとも、この運命を肯んじえぬ思いが蘇ったのか。やがて羊角山が闇に没することを前提に解釈すれば前者である。だが、その残像が彼女の脳裡から消えるとは想像できない。忌わしい人生をはかなんで自ら命を絶とうとしたが、二柱のために帰郷を決心した翠屏を、この先に続く艱難に耐え生に踏み止まらせるものがあるとすれば、それは物怖じせず忍耐強く逆境に抗う劉元の記憶のほかは何があらう。

翠屏にもまして注意を引くのは、眼の見えない二柱の痛々しい姿である。汪大辮子は、息子の視力が少しでも回復しているのを願って、我家や井老人の家が見えたどうか息子に確かめる。しかし、二柱は首を横に振るばかりである。帰郷しても辛い生活が続き、何の慰めを得られないのを、さすがの汪大辮子も気づかざるをえなかったに違いない。二柱の痛々しい姿が象徴するのは、世代が変わっても、何時終るともしれぬ「漆黒の人生の長夜」である。二柱が大切そうに抱きしめる玩具の刀に喩えられているのは、言うまでもなく、やがて始まるであろう彼等の世代の闘いにほかならない。ここで、私は物語の中を流れる時間から、物語が書かれた時代を流れる時間へと否応なしに引き戻らされる。

終章が書かれたのは、中華人民共和国建国後の一九五一年である。物語の中で、「漆黒の人生の長夜」から脱せんともがきながら、何の展望の得られぬまま傷つき疲れた心を抱いて彷徨する父祖の闘いを継ぐ次の世代の「漆黒の人生の長夜」との格闘がようやく始ろうとしている時、現実の歴史は、物語の時間を追いついて進行し、「解放」という結果を齎した。蕭軍は、「解放」へ至る完成された革命の歴史の筋書きに沿って、約束された未来の曙光、所謂「光明的尾巴」をもって物語を締め括ることもできたろう。しかし、その結びに置かれたのは、盲いた子供の姿と日没の情景である。未来に約束された平和な生活を予感させるものは、ここからは見出し難い。

蕭軍が、中共が国民党との内戦に勝利することによって、「解放」が齎されると期待していたことは疑われない。しかし、中共に導かれた革命の陣営内部の対立が、外の敵に対するのにもまして、深い不審や激しい敵意を醸成するのを具に経験した彼が、中共の統治の帰趨の如何について確信が持てなかったであろうことも想像に難くない。はたして「漆黒の人生の長夜」に終止符が打たれるのか否か。蕭軍は、『第三代』を締め括る汪大辮子とその家族の不安な前途に、かかる彼の払拭し難い疑問を重ねあわせたのである。だが、蕭軍は決して悲観していない。さらに「漆黒の人生の長夜」を歩まねばならぬ彼等の前に、林青の見出した人性の光が点っているに違いないからである。

(東京女子大学教授)